

オイラが禁煙した理由

四四

オイラが禁煙した理由

風を感じて三上は覚めた。カーテンがほんの僅かに揺れていた。寝しなに一服<sup>いっぷく</sup>つけ、窓を五寸ほど網戸にしてそのままだった。痺れて右の肩から先に感覚が無い、腕を女の枕に貸していた。女を起こさないように気を付けて腕を抜き、布団から出た。窓を閉め、カーテンを直すついでに空を見上げた。白み始めていた。三上の部屋は昭和四十二年に私鉄が分譲した四階建の一階だ。同じ造りのD棟<sup>どう</sup>が南にあり、E棟の一階から見える空は狭い。東西に細長い空は透明に高く、予報どおり今日も一日秋晴れのようにだ。

横に戻ると女は目を覚まし、腰をひねって三上を向き、オカッパ頭を顎にすり付けてきた。女はチビだ。年は十八だが上掛うわがけから出た肩は小さく、乳も小振りで手の平で作る凹くぼみに丁度だ。腕を枕に貸して目を閉じていると、子供を寝かしつける親のように、すぐに眠れた。

今日は定休日だ。もう一と眠りしようと思い、腰を寄せると知らぬ間に女はパンツを穿はいていた。そろそろ女は次の生理だ、股の形を布地かのじのうえからならぞってみた。当て物の厚みは無く、生理の手当て穿いたのではないようだが困る。女が膝をこすり合わせてパンツを脱ぎ、三上の手を引いて股に押さえた。

その気にさせた責任は感じるがこっちは四十三、もう一と眠りしなければ応えてやるのはきつい。取り敢えず四つ這って被さり、万歳の恰好に押さえた。

女は飛びきり胸が弱点だ。乳を舐めるフリで笑い出し、息を吹いて擦ると乳暈に鳥肌をこしらえて仰け反る。

夜は明けてきたが部屋はカーテンで暗い。腋の下がなま白く、二の腕が痛いくらいに細く見え、女は華奢で果無い。眠る前、ゴム無しで放った。思い返すと酷い事をしたようなキュンとした気分になる。女は摘発された売春宿にいた外国人の売春婦だ。行きがかりで部屋に置いてやり、シャツやパンツを買

つて着せ、飯を喰わせて一と月間面倒を見てやっている。三上にどう扱われようと嫌いやと言いえる立場ではない。：：、女を嫁にしてやろうか。気分がキュンとしてひよいと思ひ付いた。

八十で四十前の嫁を貰った地主さんがいた。やるじゃんと言いった。他人事ひとことだから何でも有りが男と女さ、ロマンチックで素敵さと笑えたが自分が当事者になれば話は別だ。少しマジになれば二十五の年の差は半端はんぱでなくだるい。子供もできるだろうし、こつちが六十のジジイになっても相手は三十五、女の盛さかりもこれからだ。腹の上に放つつもりを偶々ドジつたが外国人の売春婦を相手に、たった一度のミス

で胸キュンしても消耗だ。

気分を整理して女の胸に息を吹いた。女は笑いだして仰け反り、股の付け根の叢むらがりが三上の鳩尾みぞおちにこそすれ、刺々とげな毬まりのようだ。腹の目方めかたで刺々を押さえ、女を平ひらったくした。暗くて鳥肌は見えないが痒いぼみたいに硬く乳首が舌に尖り、いつもどおりだ。

時報で気が付くと七時だった。野球を聴いているうちにソファーでうつら／＼していた。明日は定休日だ。お盆休みが終わって間が無いし、土曜日に撒まいたチラシの残響や業者からの問い合わせも、もう無いだろう。日報を書き、そろそろ帰り仕度だ。

三上の会社、有限会社最上恒産は淵野辺駅に徒歩二分だが駅に行く太い道路と直角な道に付いていた。银杏横町とは反対側の幅員四メートルの駐車禁止の一方通行で、飛び込みのお客は週に平均二組がせいぜいだ。パートの主婦を留守番に置き、地上げと競売で物件を仕入れ、年に二、三棟、小さな建売を売っていた。

机に移って日報を付け、クーラーを止めに立つとドアに吊した鈴が鳴った。

「社長、私を買ってください」

返事に困る、鈴の音に振り返るといきなりだ。三

十前後の女で顔に見覚えがあった。

「……、なんぼくらい？」

言ってから、マズい返事をしたと思った。

「五十万円で、私を買ってください」

一回でだろうか、随分な値段だ。改めて顔を見れば**気狂**か**狐憑**きみたいいな**雰**囲気**の**表情だ。危なくて腰が引かざる。

「ま、座りなさいよ」

ソファに座るよう促して思い出す。去年の春のまだ寒い頃、上矢部の賃貸を契約した夫婦の奥さんだ。オシメをした女の子がいた筈だが、連れていな



くて分かるのが遅れた。

「三十万円でも二十万円でもいいです、私を買ってください」

奥さんは入口に突っ立ったままだ。逆上のぼせてこっちの声が入りに入っていないのだ。

「だからさあ、まず座りなさい」  
強く言った。

正気を失った表情は不気味だが奥さんの目鼻立めはなだちはそこそこに可愛い。乳も大きそうだし中肉中背で抱くに手頃だ。しかし二十万円は高い、町田のタンポなら一万五千円だ。八王子の三崎町でも正味六十分で二万円だ。一人に二十万円も使うくらいならト

ルコ（ソープランド）に十回行った方が余程お利口だ。奥さんよりはるかに綺麗で若い女が選り取りのうえ、早い時間には入浴料の割引も有る。

「どうしました？」ソファーに腰を下ろした奥さんに遅れ馳せの予防線を張った。「デモと軽く言われても二十万円なんていう大金、いま持っていないよ」

返事に困り、値段によっては身体を買っても良いような応え方をした。事情を訊いて二、三万円なら貸してやろうと思った。家族全員を記載した住民票と保証人の印鑑証明は、コピーして契約書と一緒にファイルしてある。二十万円貸しても取りっぱぐれ

の心配はまず無いが、貸さずに済ますのが一番だ。

「いくらならいいんですか？」

ムツと来る、盛り時の犬や猫ではない。

「一万九千八百円くらいなら、考えてあげてもいいですよ」

ムツと来て事情を訊いてみる気は無くなった。帰ってもらうつもりで言っただけだった。

奥さんは睨むように見た。まるで理不尽な科白を聞いたような目だ。冗談じゃない、こっちにも好みとかムードとか計算、そして常識が有るのだ。正気を失った顔を鏡に映して見せてやろうか。はっきり言っただけなのに奥さんのためにもなる、引き取って

もらおう。

「それでいいです」

先に言われて慌てる、言い方に腹を据えた迫力が有った。

「嘘ですよ、アナタのお股と仲良くするのは嫌ですよ。なにチャンでしたかお子さん、あの子が顔を出して来たかと思うとちよつと遠慮です。つまりイチキュツパくらいなら事情によつては貸してあげてもいいですよ」

慌てる理由は一つも無い、藪から棒で迷惑しているのはこっちだ。言い訳めいた事をしどろもどろに言い、損をしているような気分だ。

「社長さんって顔は優しいのに、言う事は露骨な  
んですね」

「なしてさ？ 要はなんぼでパンツを脱いで股を  
広げるか、その相談でないの」

「そうだけど、…」

奥さんは目をそらした。パンツを脱ぐ自分の恰好  
を想ったのか曖昧に笑い、危ない雰囲気は薄れた。

奥さんは緩いワンピースに生足だった。向き合っ  
てソファに腰掛けている。太股の裏が少し見え、  
揃えた膝小僧が天井の電気でトロリと光ってエロい  
気分がしてくる。遊ぶには子どもを一人産んだ女の  
身体が最高だと、むかし読んだ男の週刊誌に書いて

あつたのを思い出す。奥さんはどんな具合か知りたくなる。しかし知事から免許されている真つ当な業者だ。地元で素人の女を、ましてお客さんの女房をいじる訳にはいかない。改めて訊いた。

「で、どうしたのさ？」

お金が必要になった訳を奥さんは話した。

子供が小学校に上がるまでには団地でも好いから自分達の家を持ちたいと常々旦那と話していた。オシメの心配が無くなったので子供を預けて頭金の足しに仕事をなにか見つけようと思った。母親が専業主婦では保育園に入るのは無理だった。隣の奥さんの紹介で子供を預かってくれる人が割と簡単に見

つかった。子供がなつくか練習で二、三日預けてみた。大丈夫そうなので幾つか面接を受けたが思わしくない。しかし久し振りの自由な時間は嬉しかった。面接会場で言葉を交わした女と帰りにお茶を飲み、誘われてパチンコを試してみた。嵌った。いきなり777が連続で来た。熱くなり、貯金を注ぎ込んだうえに五十万円の借金ができた。

「会社をクビにする気か！　なんでサラ金から俺に電話が来るんだ。相模原の駅前に立つかしてでも五十万、今晚中に何とかしてこい」

旦那にバレた。叩かれて蹴られ、庭へ放り出された。謝っても頼んでも家に入れてくれない。蚊にス

カートの奥を喰われた。近所の目も有る。

「なんとかするにも裸足はだでは何処にも行けないです。ちよつとだけでも家の中へ入れてください」

トイレの方から声がして、小窓からサンダルが落ちてきた。仕方がないので履いて駅に向かった。町田に住んでいる姉に相談したかったが電車賃はおろか電話を掛ける十円玉の一枚もない。夕飯の仕度中だった。財布は食器棚に自転車の鍵と並べて置いてあった。

馬鹿な事をしてしまった。仕事を探そうなどと思わずに子供と遊んでいれば良かったのだ。旦那が最初の男ではない、でも惚れている。相模原の駅前に



立つなんてとてもできない。それに相模原は矢部の向こうだ、淵野辺から二駅ふたえきも歩くのは遠い。思いあぐねてふと見ると、『土地・建物』の置き看板が小路の奥でクルクルと回っていた。

「馬ッ鹿じゃねえの」

笑ってしまう、まるでラジオかテレビの人生相談の世界だ。しかし偉いえら迷惑だ。三上は尻の財布から一万円抜いて渡した。千円でも多いと思ったが何となく恰好をつけた。

「早く家に帰りな。それともお姉さんに連絡して一緒に謝ってもらいな。もたもたしている、パンツを下げてズッポリやっちゃうぜ」

連絡に店の電話を使わせる気は無かった。下手をすれば目途がつくまで付き合う羽目になりかねない、  
錢にもならない厄介は御免だ。督促の電話が旦那の  
会社に来るくらいだから家賃の滞納をしていないか  
気になったが入居物件は先物で最上恒産の管理では  
ない、どうなっているか知る必要も有るまい。奥さ  
んを外へ出し、看板を仕舞った。戻って来られたり  
したら面倒だ、留守番録音に電話を切り替えて店を  
すぐ出た。

三上はカウンターの奥から二番目の椅子に腰掛け

た。アルバイトのユリだけがいた。八時が近いのに  
洋子の店はお客さんがゼロだった。

「ママはまだ？」

「そう、まだ上。お買い物からは帰っているみた  
いだけど、：：電話してみる？」

洋子の店はスナックだが気の利いた喰い物を出す、  
下ごしらえで忙しいのだろう。

「来ないほうがいいよ」

「どうして？」

「見飽きたよ、ママの顔なんて」

「ひどーい！好きだから来るくせに、言い付け  
てあげる」

「いいよ。チクる女ってオイラ餓鬼の頃から好きだよ」

オシボリを受け取る。手を拭いて裏返し、眼鏡を外して額と鼻の付け根をぬぐう。首を拭きかけてやめた。完璧にジジイだ。今日の昼、車のラジオで聴いたジジイの目安そのままだ。まだ四十三、厄年を過ぎたばかりだ。

「コーさん、最初はナマでいいのよね？」

三上は頷く。ユリにも生ビールを勧め、グラスを合わせた。空きっ腹に沁みる。胃潰瘍の傷痕で泡がプチプチ弾けるみたいだ。

「ユリ坊の出は、何曜日だったっけ？」

乾杯したユリはボトルの用意を始めていた。ピツクで氷を砕く危なっかしい手付きを見ているのも暇で訊いた。

「教えてあげない」

「なして？」

「ギヤルだから、ユリボウなんて言われるとプリンなの。それにアルバイトの曜日は、もう千回くらい教えてあげているから」

「怒んなよ。でもオイラ、一応はお客さんだで。

意地悪言わないで今一度いまいちどいいじゃん」

「今度は忘れない？」

「忘れないように、努力はするよ」

「イノチカケル」

……、命懸ける？ か、

「バカ、命なんて懸けねえよ。代わりにオツパイでもお尻でも触ってあげるだよ」

「ワァーイ、絶対ね？」

「おー、ゼツテーださ」

「私の都合とかで変えてもらおう時もあるけど、基本的に火曜日と土曜日」

「だからだ。火木土がオイラの事務所のゴミの日だろう、それと似てるんだよな。ゴミの日だって頭に入力してあるから、団地の月水金と混乱してしま

うんだ」

「それって、もう千回くらい言ってるよ」

「勘弁してやってよ。記憶忘れはジジイだけん、仕方ないだよ」

「コーさんはまだ、全然ジジイに見えないよ」

「ほんとかい。マジで言ってるんなら嬉しくて、じやあお嫁さんになってくれる？ なーんて訊いちやうで」

「ワイー、なっちやう！ コーさんに告白されちやった」

「バカ、冗談だよ。二十と四十じゃ、犯罪だぜ」

洋子が降りて来ないと食い物は出ない。バイトに来て二年ちかくなるのにユリは乾き物を皿に分けるしかできない。短大を出て世界的に名前の通った企業でOLをしているのだから頭はお馬鹿ではないのだろうがチーズを切れば粘土細工だ。カマンベールとかではなくプロセスチーズでだからひどい。

「寿司でも頼むかい？」

「御馳走してくれるの？」

「オイラは根性無しだよ。見せびらかして一人で喰えるくらいの器量が有るなら、都庁の新しいビルの右か左の半分か桜木町のランドマークタワーくらい、とつくせづくに社有だよ。ママのぶんと、あと



少し注文しな」

言いながら能書きが多い、ラジオが言ったとおりの立派にジジイだと思う。

矢部の住宅街の小さなスナックだった。カウンターに椅子が十一脚と四人掛けのボックスが一つの狭い店だが以前はもっと小さかった。一戸建の中二階こだての下のガレージにカウンターを据すえた、客が六人入れば寿司詰めの店だった。二年前にRC（鉄筋コンクリート）の三階建に建て替え、どうにか普通の小さなスナックになった。

寿司が届いた。三階に電話して洋子を呼んだ。女

の子がもう一人出勤して来、客も来だした。ポツリ／＼の客足でもカウンターに女が三人の店は丁度良いくらいにすぐ埋まる。ユリとデュエットで歌った。「ママにもちよつと話したけど、彼と付き合ってみようかと思うの」

最初の間奏が始まるとユリが耳もとで言った。

「の、ようだね。オイラの若い頃には敵かたわないけど、それなりにイケてるし真面目まじめそうだし、良かったんでない」

勘かんの鈍にぶい方ほうではない、気が付かないフリでいようと思っていた。ユリと歌いに立った時、市か県の職員だという最近見かけるようになった若い男が店に

入ってきた。コンマ零秒、ユリと視線が粘るのを感じた。

「うまくいくといいね。余計なお節介だけど、先に行つてオイラみたいなバツイチは女でもみつとも悪いで」

糞くそつたれだ。ユリを好きでも嫌いでもない。馬鹿が通じて面白い、それだけの相手だが盗とられたみたいな損をしたような気分だ。癩しやくなので勘定を頼んだ。いつもはドア迄なのに、見送りにカウンターを出たユリが路駐した車まで付いてきた。

「まっすぐオウチ？」

「な、訳ないですよ」

「独身の健全な青少年じゃなかったの？」

「だからこそ真面目に寄り道をするだよ」

セルを回した。窓を下げ、ハイタッチして別れた。

「もろ中学生でなくない？」

「大丈夫、十八ですよ。なんならパスポート、見  
てみる？」

「べつにいいけどよ」

どうせ一度だけの相手だ。十八でも十三でもする  
事は同じだ。断ったのだが亭主おやじは厨房に声をかけて  
セカンドバッグを持って来させ、輪ゴムでまとめた

パスポートの束をカウンターに出した。

お利口に真<sup>ま</sup>っ直<sup>す</sup>ぐ帰<sup>かえ</sup>るつもりだった。トルコで一と汗流<sup>あせ</sup>したい気もしたが何となく間<sup>ま</sup>の悪<sup>わる</sup>い感じの夜だ。ユリは小僧に盗<sup>ぬす</sup>られるし、その気になればイチキユツパで人妻と遊<sup>あそ</sup>べたのに遠出<sup>とん</sup>して事故<sup>じこ</sup>を貰<sup>もら</sup>ったりしてもつまらない。そのつもりが車を転<sup>ころ</sup>がしてすぐ、事務所の電気ポットのプラグを抜き忘れていた気がした。明日は定休日だ、確認<sup>かくん</sup>に戻<sup>かえ</sup>った。プラグはちゃんと抜<sup>ぬ</sup>いてあり、電話<sup>でんわ</sup>の留守番録音<sup>くすばんろくおん</sup>のモニターが明滅<sup>めいめつ</sup>していた。

土曜日<sup>どようび</sup>に撒<sup>ま</sup>いた合同<sup>ごうどう</sup>の折込みチラシに、七月<sup>しちがつ</sup>の末<sup>すえ</sup>に手付<sup>てつけ</sup>を打<sup>う</sup>った中古住宅<sup>ちゆうこたくざい</sup>を建築<sup>けんちく</sup>プラン付き売り地<sup>うりぢ</sup>で

載せていた。反響は業者だけだった。ユーザーからの残響を期待してテープを再生すると着信は一件で、売春宿の亭主からだった。店の名前を告げただけで切れていたが電話を寄越した理由は明らかだ。女が何人か新しくなり、さっそく営業をかけてきたのだ。

亭主とは半年の付き合いだった。二月、貸し店舗を探して三上の店に来た。住居付きのスナックか居酒屋を居抜きで希望していた。貸し店舗を探すお客の相手は苦手だった。横浜線の相模原が希望の筈が小田急相模原に変わるくらいは珍しくないし、予算も七万か八万の家賃でなんとか頼むと言っておきながら他の会社に行って十五万、二十万の物件で契約

して知らぬ顔だ。逆の場合もしよっちゅうで、真面まともに相手をしてもおよそお金にはならない。直ちよくの物件でも有れば別だが先物さきものの案内図と間取まどりのコピーを二、三手渡し、それで忘れた。

亭主は一と月ちかくしてまた来た。お陰様かげさまで上溝駅の少し手前に店が決まった。市役所から一本道で黄色い看板が目立ってすぐ分かる。都合が良ければ遊びに来てくれ、いろいろ世話をかけた御礼ごれいだと言いい、開店パーティーの案内状を寄越した。

ふざけた野郎だと思った。なにがお陰様だ、祝儀が目当てなのが見え透とおいている。キューピーを大人おとなにしたようなふざけた面つらをしているが言種いぐきも面に劣

らず上等だ。行くのはかまわないけど他社で契約し、こっちはちっとも面白くないのだから御祝おいわいなんかは持って行かないよと言ってやった。

亭主が帰ってから店の所在を明細社の地図で調べると二戸にこい一いちのスナックか居酒屋で、どちらかが競売予定なのを二、三年前、金融内報で見た気がした。次の日に法務局に行ったついでに謄本を閲覧してみた。記憶違いだった。両方とも平凡な甲区と乙区でつまらなかった。千三せんみつが商売だし一応はお客様だったのだ。わざわざ挨拶に来たものを無視するのも可か哀相わいそうだ。勿体ないと思ったが一万円包みつつ、最初が最後のつもりでパーティーに行った。



新規開店なのに店は外も中も汚く、造作ぞうさくにも備品にも亭主はお金を一切かけていなかった。看板と有線放送のチューナーだけが新品で、居抜きを雑巾ぞうきんで拭いただけだ。カラオケがいまだに本を見て歌うハチトラなのだから立派だ。道に五、六基並んだ『祝開店』の花輪が笑っちゃう腐れな店に若い女が七、八人いた。パーティーの助っ人すけとにしては多過ぎるし半数は明らかに日本人ではない、全然怖くない顔なのに亭主はヤクザだったのだ。店の二階の六畳と四畳半に女達を寝起きさせ、売春をさせると教えられた。結局一万円の祝儀で飲食し、ショートで女を御馳走になった。ヤクザに借りは作りたくない、料金のシ

STEMを訊いた。招待しておいて銭は貰えない、ロハが嫌なのなら敵娼にチップをなんぼかやってくれと亭主は応えた。常連にしてやろうという魂胆は見え見えだが気分は悪くなかった。

言葉の通じない女との娯しみは知らない身体をいじることだけだ。今度のはどんな身体でどんな反応かといじり始めるまではワクワクする。しかし見て呉れは多少異なっても縦向きなのが横向きである筈もなく、一回いじれば沢山で同じ女を二度も三度も買う気にはならない。公序良俗に反した商売をするだけあって亭主は三上の趣味をすぐに飲み込み、女の顔ぶれが一人でも変わると必ず電話してきた。

テープを聴くとどんな女が来たのか気になる。しかし寄らずに帰ろうと一旦は決めた。七月の末に手付を打った中古住宅の引き渡しを受けたら解体し、ブツ切りにして捌く計画だった。建付と建築条件付売地での予定だが目論見は時として外れる。免許が

②なだけの超零細の業者だ、売れずに半年も抱えたら確実にパンクだ。捌く自信は満々だが売却の目途が立つまで女遊びは取り敢えず我慢だ。不思議なもの、女遊びは使ったつもりは二倍は銭が消えていく。それに明日は定休日、掃除をしたり洗濯をした。布団も干して、一日の前半が勝負だ。しかし新

しい女が来たらしいと知ると、やはり気になる。

離婚が切っ掛けだった。調停に呼ばて有給休暇を  
半日取るのにも同僚や上司に気を使わなければなら  
ない給料取りの生活がかつたるくなり、包装センタ  
ーの在庫管理を最後にチェーン店の社員を七年前に  
辞めた。入社二年目くらいから竹竿たけざお売りやチリ紙交  
換ひとであつても独り社長おやかたが一番だと思つてはいた。独  
立とか起業には憧あこがれたが不動産業をやるようにな  
るとは夢にも思ひはしなかつた。入社三年目に独身  
寮を出される時と別れた嫁と所帯を構えるとき不動  
産屋を何軒か回つたが、胡散臭うさんくさい感じがして真つ当  
な人間のする仕事ではないと思つた。そうは思つて

も面接会場が横浜駅西口のリッチホテルなのが珍しくて応募して聞いたA物（社有の新築）が五十万、B物（下取りと他社物の買上げ物件）が三十万円という歩合は魅力だった。

辞めた会社には肉や魚の加工と包装を店舗内で行うのが一般的だった昭和四十六年に入社した。十一人いた同期は二年前後の間隔で店舗や部門を移ったが何故か三上だけはずっと鮮魚部で、アラ桶おけの洗い方から始まって魚介類の扱い方を職人さん達からみっちりと仕込まれた。仕入れの仕組みやルートも担当者の助手や代行をしておおよそは承知していた。いずれは販はんやかな通りに店を構こえるのを目標に、曜

日を決めて団地をまわる引き売りから魚屋を始め  
るつもりで会社を辞めたのだが、別れた嫁に退職金  
まで渡さなければ追いつかない調停の結果となり、  
身動きが取れないでいた。中古住宅の契約一件で三  
十万円も貰えるなら冷蔵ケースを付けた軽トラック  
の購入費くらい一と月で稼げる。本社が厚木に在っ  
た社有物件の訪問販売が専門のその業者に雇われ、  
十歳は年下の班長に営業は御用聞きじゃないんだと  
叱られながら他人様の玄関を毎日百軒たいて四  
番（飛び込み）を憶えた。

「ケツコーです！」を千人に言われて断り言  
葉に慣れてしまうと家を売るのは相手の言葉に同意

を重ね、頃合ころあいを見て「はい」を引き出すゲームのようなものだった。ゲームで儲もけた銭でもゼニはゼニだ。現金で仕入れたサンマやカツオを商あきなって稼稼ぐ日銭ひぜにも、先物さきものの一戸建やマンションを仲介して稼稼ぐ手数料も、同じゼニだ。一千万円を目標に銭を貯め、三年かかって不動産屋の店を構えた。

今のところ結果オーライのようだが思い返すと何とも行き当りばったりで冷汗れいかん三斗さんと、にが笑うしかない。業種や経緯は兎も角、給料取りの殆ほとんど全員が夢想するだけで終わりの事を実際にやってしまっている、性分しょうぶんはヤンチャだ。やりたい事をやりたようにやらなければ十三年間勤めた会社を辞めた意味

が無い、それに帰って寝るには酒も半端だ。ビールを二、三本飲み、新しく来た女達を眺めるだけにすれば三千円でお釣りが来る。誘惑に負ける心を正当化した。

行けば新しく来た女の尻や胸を服の上から眺めて飲むだけで済まなくなるのは、はっきりしている。財布には二万と少ししかない。部屋に帰れば二十四本入りの缶ビールの買い置きが半分は残っている。我慢してお利口に帰るべきだと思いつつ仮伝を切り、机の引き出しの鍵を開け、手持ち金庫から金員を十万円財布に移した。

先客は二人いた。一人はカウンターでビールを飲



み、亭主の女房を相手に話しこんでいた。もう一人はボックスでお気に入りの女の肩を抱え、更に二人、女を前に並べて焼酎の水割りを飲んでいった。客は二人とも女を連れ出して遊ぶつもりは無いようだ。お盆休みが終わって間が無いし給料日までは二、三日ある、ふところぐあい 懐具合がきついのだろう。もう一つのボックスに女が四人いた。ひらひらした夜の服装でなく、そこいらを普通に歩く恰好をしていた。その四人が新顔で、亭主と三上を気にしていた。

「アレでオツケー？」

亭主に訊かれ、迷ったが頷く。髪がオカツパなせいか際立きわだって若く見えたから話題にしたが、その右

隣の方が服を着ていても判るボイんな胸とストレー  
トの髪が女くさくて好みだった。しかし娯<sup>たの</sup>しみを次  
に残して置くのもお遊びだ。

オカツパ頭に合図して亭主は椅子を一つ横に動い  
た。眼鏡を外して三上はパスポートを見直す。尻に  
手のまわる距離で女を見ればマジで日に焼けた子供  
だ。ボックスにいた時にはもう少し大人に見えた。  
パスポートを見直しても年齢は分からなかったが日  
本国のスタンプが押してあるから十八才なのは確か  
なのだろう。取り敢えずビールを注いでやった。飲  
めない<sup>ことわ</sup>いと断ると予想したのにグラスを合わせて美  
味しそうに飲み、ちよつと吃<sup>びっく</sup>驚した。チビだから子

供に見えるのだろう、オカッパ頭の頂辺てっぺんがこっちの肩の高さだ。

「いいでしょう？ ゆんべ成田に着いたばかり、まっさらの新品ですよ」

「本邦ほんぽうでは未だバージンですってか」入国日と思われる日付は二日前だが指摘するのも大儀たいぎだ。「でも疲れているんでない？ 夜っぴいてか朝っぴあらか、飛行機に乗ったり車に乗ったりで」

「平気ですよ、着いた早々お金を稼げるんですよ。それにコーさんのぶつとい注射でたちまち元気回復ですよ」

亭主は三上の分からない言葉の片言かたことで女に何か話

した。テニヲハが付いていた。有線からはコミカルなデュエットの曲が流れ、客も女達も話を続けていたが店の中は何となくシンとしていた。遊ぶ相手を決める時に漂<sup>ただよ</sup>う寂しいような哀しいような特有の空気だ。

手酌して新しいビールを頼むと話が終わったらしく、三上を見上げて女が頷いた。派手<sup>はで</sup>と言うかオリエンタルとでも言うのか猫みたいな感じの目立<sup>めだ</sup>つ顔だ。自分的には好みではないけれど客観的にはクレオパトラか楊貴妃タイプの美人だ。

「何を話したの？」

買われる側<sup>がわ</sup>にも気に入らない客を断わる権利が有

つても良い筈だ、俺の店の営業方針は自由恋愛だと言  
い、亭主は女が相手を嫌えば連れ出しを断わって  
いた。合格のようだがいつもより話がだいぶ長かっ  
た。

「コーさんは遊び人のように見えても根<sup>ね</sup>は真面目  
で優しい人だから、気に入ってもらって身<sup>み</sup>請<sup>う</sup>けして  
もらえと言ったんですけど？」

「嘘だろ？」

「他の女と遊びづらくなるって？」

「そういうこと」

「同じ事をまた言うのも何ですけど、そうした方  
がいいですよ。ゴムを着<sup>あ</sup>けちやえばお道具の塩梅<sup>あんばい</sup>な

んでそんなに違うものじゃないし、ウチに損はないし、女にしても今日はどんな客の相手をするのか毎日分からないより助かるし、……」

事務所のパートを三上の嫁か彼女だと思っていた亭主は、バツイチの独身と知ってから女を買い取れと熱心だった。四十男の独り暮らしは薄汚くてみっとも良くない、仕入れ値で譲るし暫くそっちに置いてみて、しつくりしなければ一回や二回ならチェンジしても良いからと勧めた。三月に一度、ガムかサイパンにでも行って来れば三年間は女を日本に置いておいても問題は無いそうで、そう始めた客もいると名前をあげた。

面白そうな話だが女と暮らす生活は一度経験すれば十分だ。それに一緒に居たくなるような女にも行き当たっていない。行き当たったとしても仕入れ値で譲る亭主の算盤が見えない、親切で言っているだけかも知れないが相手はヤクザなのだ。

「ま、取り敢えず遊んでみるよ」

「泊りでいいですね？」

亭主に四万円払い、女房に声をかけて三千円渡した。ビール代だ。夫婦は何故か財布が別で、スナックの売り上げは女房の管理だった。

亭主にパスポートを返すと、いっぺんに五人も女を新しくしたんだから明日の晩も遊びに来て売り上

げに協力してくれと笑った。亭主はセカンドバッグを厨房に戻していた。厨房は女房の父親がやっていた。年のせいか一言多<sup>ひ</sup>く、亭主も言い返して必ずややつこやしくなり、すんなり用の足りた例<sup>た</sup>はまず無い。たいして邪魔にもならないのでジャンパーの内ポケットに収めた。

女房から貰ったお釣りの六百円を女にくれてやった。女は亭主が領くのを確かめ、三上を見上げてニツと笑った。笑うと冗談でなく子供だ。しかし尻は充実していた。女は股のあるスカートを穿いていた。店を出る合図でつくと、袴<sup>はかま</sup>を着<sup>つ</sup>けているような腰高な尻の恰好がプリプリな肉の弾力で、思わず触



り直して撫でた。

時刻は十一時を過ぎていた。ニューにしたボトルを洋子の店で三分の一は空け、更に今ビールを三本飲み、助手席には外国人の売春婦だ。飲酒の検問に遭ったりしたら一発でアウトだ。道は仕事柄タクシ一なみに詳しい。女にもシートベルトをきっちりと掛けさせ、横山坂上のバス停を右に曲がり、村富線の裏道を陽光台のモータールに向かった。道順を考えて真剣に運転しているのに、女のスカートの名称はキャロットでなくキュロットだと、ひよいと思いついた。

女は嘘のような身体からだをしていた。合図からだでつついて感じた以上に腰の位置が高く、肋骨あばらが僅かに透けて肉付きは薄いけれどしなやかに括くびれ、乳首が上向きで小振りな乳がツンと豊ゆたかだ。しかし女は照明を嫌った。暗くしては折角せつかくの身体が勿体ない。風呂の電気を点け、脱衣場のドアを開けたままにした。小麦色の肌がなま白く、子供っぽい顔が怖いくらいに妖艶に見えてナイスだ。

乳を舐めると女は笑いだし、肩を押さえても俯うつぶせになろうとして腰をねじった。首を吸つても同じで、縦細たてほそな臍へそに舌を入れると脚をバタバタさせて暴れた。本物の中学生をいじっているようで面白かつ

たが押さえ付けて力を使うのもだるい。仰向けにして腹に乗せ、内股<sup>うちもも</sup>を足で拵げた。回転ベッドや震動ベッドがオーケーだった四、五年前のように、天井に鏡が付いていれば見せながらいじれてもつと面白いのにと思った。

呆気<sup>あっけ</sup>なく溢れたが女は何もしない。ベッドの枕頭台に置いてあったサービスのゴムを手渡し、鼻先に状態を示しても腹から降ろされたままの恰好だ。買った女に見栄や体裁は無用だ。自分で元気にしてゴムを着け、指で合わせたが芳<sup>かんば</sup>しくない。海老に曲げ、尻をまるくして打つても有耶無耶だ。

女と遊ぶには三上は酒を飲み過ぎていた。開店パ

ーテーからの常連でも素面しつぽやホロ酔いで女を買いに行くのは照れる。しかし不能の本当の原因は年だ。四十を超えてから三回に二回くらいの頻度で駄目だ。自覚した当座はさすがに落ち込んだが段々だんだんに慣れ、今は平気だ。

亭主の店は三上の事務所から車で十四、五分で行けた。自宅からも遠くないのが便利で週に一度は女を買って遊んでいた。開店からの半年で二十二、三人と遊んだが、殆ど全員が明るい部屋を嫌いやがった。希望どおりに電気を消し、擦くすくって自慰をさせた。笑うのが苦しくて渋々自分をいじる女を更に擦り、部屋を明るくして恰好をいろいろにさせた。三回に

二回の頻度の不能でも慣れてしまえば工夫次第で面白く遊べた。嘘みたいになイスな身体に逸つたが、いつもどおりに遊べば好いのだ。

一服つけに女から離れた。緩くなつたゴムが女に挟まれ、虫下しで先を出した回虫を引っ張るみたいに伸びた。外したゴムをティッシュに包んでゴミ箱に捨て、なにげに見ると女は眠っていた。爆睡だ。電気を明るくしても乳を舐めても反応が無く、寝息をたてて大の字だ。女の股を調べた。指で合わせた時、すっきりして綺麗だが僅かに左右相称でなく感じた。黒子だった。分けた右側に生米みたいな形と大ききで、指をよけると合わさって隠れた。

七年前、初契約のあと班長に連れられて福富町へ行った。驚天動地、目から鱗だった。ちよつとした美人がするするとヌードになっただけでも魂消るのに、トランクスを下げてカッポリと啜えた。銭が全て、銭が正義だ。遊びたくて稼いだ。自分で会社をやれば稼ぎがまるまる自分の儲けだ。そうは問屋が卸さなかったが店を構えてからも月に二、三回のペースで遊んできた。月に二、三回でも年に三十人、七年間で二百人、プラス亭主の店の二十二、三人と遊んで合わさって隠れる黒子を見るのは初めてだ。珍しくて撫でたり摘んだりした。しかし三分で飽きた。明るいのを嫌がったり、嫌がりながら濡れ、

引く糸に照れるさまが面白くて銭と時間を使うのだ。撫でも摘まんでも女は眠り続け、仰向けに倒れたマネキンみたいでいじり甲斐はゼロだ。バチくさくなる。風呂で下を洗い、枕頭台のモーニングコールを八時にセットした。

あくる朝、十時丁度にモーテルを出た。すかいらいくでモーニングして女を送ると店の前に乗用車が止まっていた。別れを惜しんでいるのだろう助手席が半ドアで、降りかけた女が手振りを交えてドライブと話していた。スピードを緩めず脇を抜けた。銭で女と擦り合わせる野郎の面など明るい時間に見たくない。同時にこつちの間抜けな面も見られたく

ない。相模線のガードをくぐり、月世界で左折し、目医者先の右に曲がって129の旧道に出た。廃業したパチンコ屋の前の丁字路を右折して戻ると女に未練な車はいなくなっていたが店を右に見て過ぎた。

未練野郎もこつちと同じパターンだ。モーターの延長料金の発生しない十時ギリギリまで女の身体に執着し、安い飯を奢って十二時に少し余裕で店に届ける。——する事がセコイ。もう少し女と一緒にいたくなった。女を戻すのが正午より遅くなると五時の開店まで一律四万円の追加料金が必要になる。



一人と遊んで八万円の出費はひどくきついが超零細でも一応は不動産屋の社長だ。それに今日は定休日、どうやって過ごそうと勝手だ。しかしモーテルにUターンしてもどうせ不如意だ。眠りたがる女を八時に起こし、チェックアウトの寸前まで色々試したが結局は不能だった。

時間で身体を売る女と昼日中、動物公園を歩いたりしたら馬鹿っぽくって案外とお洒落かもしれない。公園の手前の遊園地には、所帯を構える前のデートで別れた嫁と六角橋から一度行っている。上溝からなら一時間も有れば行けるだろうし、都営の筈だから二人で夕方まで遊んでもたいしてお金もかからな

いだろう、思い付いて三上は気に入った。鹿沼台のコンビニから亭主に電話して五時まで女と遊ぶ旨を伝えた。

女は元気だった。象を見つけると半町はんちよう（五十四・五m）は一と息に駆けた。寝不足と宿酔しゆくすいの三上は真夏と変わらぬ日差しに降参だ、坂道を駆け下りていく女の後ろ姿を見るだけでバテた。学校はまだ夏休み中の筈だが平日のせいか公園に人の姿は少なく、どの動物も貸切り状態で見られ、ライオンバスでも窓に面して座れた。

ライオンを見るのが女は初めてのようだった。少なくとも手が届くくらいの距離で正対するのは初体

験のようだ。乗り場を出たバスは超ゆっくり進み、コースの半ばくらいで停車した。それが決まり事らしく、停車したバスにライオンが三々五々近寄って来た。仕事だから仕方なく来るようなダラけた様子なのに女は可笑しいくらいに固まった。怖がる相手を探すみたいにライオンが窓ガラスに鼻をつけてバスの中を覗くと、お見合の恰好になった女は音をたてて息を飲み、三上の腕にすがり付いた。でかいし額に傷が有ったりして間近で見ればライオンの貌は可成り怖い。アベックみたいで恰好が悪かったが手を握ってやった。女の手は玩具みたいに小さく、濡れているみたいに冷たかった。

バスは肉の塊かたまりを屋根から吊り下げていた。華奢な体たい軀の一頭が伸び上がったが届かず、後脚で窓を蹴って屋根に上った。見かけの割に目方は結構有るらしく、バスは揺れた。肉を喰う仲間を見上げ、下に残った四、五頭が一斉に咆えた。飼われていてもさすが百獣の王だ、咆吼はもろ内臓はらわたに響く。首をすくめて女は縮こまり、三上の手を強く握った。本当のアベックみたいで照れてしまうが気分は悪くなかった。しかしバスを降りても女が手を放さないのは参った。

丘陵にある公園は上り坂のぼりと下り坂くだりの連続で歩くのがきつい。手を引かれて女のペースで歩くとたちま

ち息が切れ、公園に来た思い付きを悔やんだ。モーターにUターンして五時まで女をいじっていた方がお利口だった。朝になっても駄目だったが、もう一と眠りすれば今頃は大丈夫になっていたかもしれない。

女はキュロットを穿き、開襟シャツのような半袖を着ていた。背筋がシャンとして髪がオカッパな女は、大抵の男ガキが丸刈りにランニングシャツだった時代、坊ちゃん刈りにして開襟シャツを着て半ズボンを着ていた良い家のボクちやまのような感じがした。しかし何処がとは言えず柔らかで優しい。なにげに判る胸のまるみがナマで見たより生っぽく、

股間に力を覚えて三上はにが笑いした。

今からでもモータールに行つて遊ぶ時間は十分じゅうぶんに有る。どうせまた有耶無耶だろうが薄切りの肉を捲めくるようにして見る黒子は初体験だ。生米をくっ付けたみたいにポツンとしていたのに撫でも膨らみを感じなかったような気がする。思い出すとどんなだったかモータールに行つて確かめたくなる。しかし公園が気に入ったらしく、手を引いて次に急ぐガキっぽい女を見ると途中で切り上げるのは可哀相な気がした。：：、既に八万円も使う馬鹿をしているついでだ、このチビを買い取ってみようか。

二年くらい前、タンボのチョンの間まにこっちが酔

つ払って不能だと尻の中を指で擦って跨がり、自在に構造をきつめて容赦なく終わりにさせてしまうイヅミさんというベテランがいた。女を買い取ってイヅミさんのように仕込むのも面白いかもしれない。女の仕入れ値は百二十万円だ。月に二、三回でも年に三十回、毎年百万円ちかくは女を買うだけで使っている。出掛ける手間やモーター代、後先の飲み代あとさきのだいや飯代を考えれば半年ちよつとで元はチャラだ。気に入らなければ交換はできるし、股の黒子はグリコのオマケより主観的にはお値打ちだ。

コアラの建物は中が暗かった。案内の放送によれば夜行性だから緑色に暗くしているそうだが肝心の

コアラが木の葉に紛まぎれて見えづらく、見えても動きが鈍くてつまらない。暇なので女を後ろから抱かかえ、腹から手を入れて股を触った。黒子を探ったが暗くてもまわりが気になるし縮れ毛が邪魔で分からなかった。

オランウータンは三上よりやる事が上うわ手だった。横木の上で器用にも、こつちを見ながら手淫いたずらを始めた。先に来て見ていた子供連れのグループは、子供の質問を胡麻菓子で次へ行った。

「オイラなら自分でやらないでアナタにやって欲しいよな」

どうせ女に言葉は通じない、八時に起こしてから



の事をからかいかけてやめた。女は暫く三上を見上げ、頭を横に振った。不如意でも身体を繋げたし既に十四、五時間は一緒だ、好みではない顔も見慣れると可愛い。

「明るいから駄目だったか？」

女は曖昧だが頷いた。言葉が通じなくても長く一緒にいると、状況と口調で意味はそれなりに伝わるようだ。

「なら今からモータールに行って、また暗くしてエッチやるかい？ それともオヤジが言うみたく、オイラが買い取ってやるうか」

女はきよとんとした。

「ウソですよ」

白けた。きよとんとした顔に、御飯の時だけは呼ばれなくてもちやかかふんとテーブルに向かっていた祖父を思い出し、疲れる。言葉が通じないのは耳が遠いのやボケなのと同じだ。百二十万円からの大金を使ってイライラしても馬鹿くさい、買い取るつもりになりかかった気分がいっぺんに冷めた。

「もつと見てく？」

類人猿は自慰を続けている。こつちを向いているがどうも女を見ているようで失敬だ。猿がどこまでやるか興味は有る、しかし結果をどうしても知りたいう程の事でもない。女の手を引っ張って柵を離れた。

丘陵にある公園は木陰が多く、日の暮れだすのが時計より一時間は早い。営業を二時に終了した食堂の前の自販機でアイスを買ひ、歩きながら舐めていると日が急に陰り、夕方の気配だ。総括すれば面白いデートだったが日暮れたら終りだ。女を促し、駐車場に向かった。女はチビだ。すぐに二、三メートル遅れ、跳ねて追いつく。随いて歩くのが嬉しい犬っころのようだ。照れくさいが手を差し出しすと、花が咲くみたいに笑って飛び付いてきた。

「御飯だよーって呼ばれた奴から順々に家に帰るのが普通なのに、自分が良い子のつもりでいる奴は五時のポー（サイレン）で帰ってよ、いいフリこい

てトサカ（頭）に来るからチャランケ（因縁・喧嘩）を付けたら泣きやがり、女っ子にチクられて三日も後になって先生のビンタと親の拳固よ。今にして思えば流行らねえ話しさ」

車の左に中央大学を見ていた。窓から入る風に夕飯を炊く薪の匂いを嗅いだような気がして独りごとを言った。しかし女の今の身の上と較べれば限り無く気楽な懐旧だ。

女は二百四十万円で売春宿の亭主に買われている。そう思い込まされている。客が亭主に払う料金は二時間のショットで二万円、午後十時から翌日の正午までの泊りが四万円だ。売り上げが元金の二百四十

万円になれば女は自由になれる。そういう約束だが仕送りが有るし日々の出費が有る。客の付かない日も有れば生理で稼ぎにならない日数も有る。三ヶ月で元金を完済して自前になる女も稀にはいるようだが大方はオーバーステイするようになり、そのうちに店を移る。要は転売だ。いつも／＼女の顔ぶれが同じだと客は店に飽きる。酷い話だと思う。しかし他人の事だし週一で女を買って売春商売の片棒を担いでいる分際が、良識を御託しても笑い話だ。

「ライオンバス、迫力が有ったない」

気分を打ち切って言った。

女は粘っばい発声で短く応じ、身振りで補足した。

車は造成地の迂回路を登っていた。仕草をしつかりとは見てやれないがライオンの様子を表あらわしているのは明らかだ。

「ライオン、ガオー」

大声で言った。

「グワオー、ライアン」

女も大声で言った。

道が尾根に至り、小山田の斎場を左に見て戦車道路に入った。山の匂いが濃く、へたれたVベルトがプーリー（遊輪）を回すみたいに虫の音がうるさい。大型車輛の通行を規制するステンレス製の太い棒のあいだを抜け、米軍補給ほきゅうじょう廠と相模原市街を俯瞰みかんす

る。傾いた日に丹沢が黒く、城山町から相模大野のはるか南まで家並いへなみが平ひらたい。人口が五十万を超えた記念の缶ビールや煙草を二、三年前に自販機で売っていたほどの大都市なのだが、戦車道路から見下ろすと平べったくてパツとしない眺めだ。ジェット機が二機、連れ立ってねぐらに帰る鴉からすみみたいに逆光の空を相模大野の家並に降下していく。

「メシ、喰ってんかい？」

「・・・」

「ウオントユウ、サムシングツウ、イート？」

平叙文を疑問文に変えるには主語の前に動詞を置けば良かったと思うが命令になっている気分だ。ジ

ヤックアンドベターから三十年が過ぎている、忘れた。女はぼかんとしている、英語を知らないのだ。

社有の建売にお客が付いた。解体が済み、重機を搬出して工務店と遣方やりかたをしていると三十半ばの男が自転車で来て、新聞の折り込みで見えていたがこの土地は売ってしまったのかと工務店の社長に話しかけてきた。まだでくすと三上は手を上げ、名刺とアットホームで流す予定の原稿のコピーを車から取ってきて渡した。四、五日した日曜日、その人の義弟おとうとが話を詳しく聞きたいと事務所に電話してきた。毎度



だが決まる時は呆気ない。

幸先さいさきが良いので売り地で捌く予定の半分も建付たてつきと決め、頭金で頂いた二百万円を着手金として工務店に入れた。工務店の社長は二棟現場になって嬉しがり、下戸げこなのに三上を酒に誘った。二十も年上の社長と飲んでもつまらない、もう一棟いっとうが決まってから盛大に御馳走になりますと断ったが、恒産さんの会社の定休日の前日にも是非としつこい。気分の乗らない仕事は早く済ませるに限る、設計士の倅せがれと大工の舎弟おとつとを連れた社長に三軒付き合って別れた。

根太ねだが腐くさってふかふかになった床ゆかの直しや外壁の補修、便所の詰まりのスッポンや樋とよの落ち葉の掃除

までこまめに勉強して仕事にしている社長は、三上と同じく相模原の生れではなかったが矢部や西門、中央では顔が広く、まわりだと二、三軒では義理が悪くなるのだ。下戸との酒は神経を使う。まして相手はファミリーだ、冗談を言うのにも<sup>あらかじ</sup>予め反応のパターンを二、三考えてからになる。社長と別れると三上は気分直しに洋子の店に行った。満席に近くお客がいて、カウンターの奥から二番目の椅子は塞がっていた。

「お元気でしたか？」

「もちろんお元気よ、コーさんは？」

「鼻血ブーほどではないけどね、それなりにお元

気でした」

「よかった。パツタリ見えなくなったから、ママと心配してたんだから」

「そんなに来なかったかい？ 一、二、三週間だろ  
う」

「ちがうよ、一と月にはなるよ」

洋子の店に来た最後は、チビな女と動物公園に行った日の前の晩だ。九月はあと幾日もない。早いものだ、残金や解体、滅失登記や確認申請で飛び回っているうちに、女を買い取ってまるまる一と月が経たっているのだ。

「バタバタしていて御免なさいね」

洋子がお通しとおしを持ってきた。手間を掛けたのだから、豚のモツのようだが少しも臭くない。

「平気だよ、忙しそうだと他人ひとの事でも嬉しいよ。なくんちちゃったりして」

「コーさんは、お仕事いそがしい？」

「お陰様でどうか御飯は食べているけど、お金ぼんが番いそがきり急いそがしいだよ」

「どうにかでも食べていければ最高だわ、ウチなんか大変。そう言えばお顔、なんだかまあるくなっ  
たみたい」

「ママと同じさ、中年ぶとり」

「でしよう？ 気になるからスイミングに通おう

かしらなんて思うの」

「ママ、それは大間違いだよ。水泳なんかしたら、浮力がついて逆にあぶらみ脂身がふえるんだぜ」

「ほんとなの？」

「本当ですよ、出まかせなのは」

「もう！ 本気にするでしょう」

洋子は怒ったフリで睨み、注文を作りに三上の前を離れた。

顔がまるくなつたみたいと言われても実感は無い。

風呂の鏡に映して毎晩ヒゲを剃っているが頬はこけたままだし鎖骨もあばら肋骨も骨格模型のように骨の形がもろに露骨で、ピアフラの難民か地獄絵の亡者のよ

うだ。とづくに諦めてはいるが死ぬまでに一度くらいは瘦やせたいと言ってみたいものだと言まジで思う。しかし腹はちよつと出てきたかもしれない。二、三日前だった。ストロークに纏まつわつて捲めくれた襞ひだの奥に覗く黒子を、無意識に腹を凹へこめて眺めてゐるのに気が付いた。仰臥させた女の腹は滑らかに平たく、胸郭の段差と腰骨の出っ張りが毀こわれ易やすい飾り物めいて果はかな無い。凹めた力を抜くとポツコリで毛むくれな自分の腹は我ながらグロく、錢で女を転はげがす禿親爺おやじになつたような気がして愉快だった。

襞の奥に覗く黒子を思い出し、速攻で家に帰って女をいじりたくなる。黒子もだが女の身体はどこを

いじつても弄るたびに反応が異なり、番たび新しい玩具のようで一向にいじり飽きない。それにどんな恰好にしても自然と元に直り、片付けや調整の手間が不要だ。まさに生きている玩具だ。ペットとは異なる。言葉が通じなくても人間だから下の躰は要らないし、へまをしても一度叱れば概ね用は足りた。……、へまと言うのだろうか、女は便器の溜まり水で雑巾を濯いだ。此奴等は教えないと糞を流す水で身体を拭いたり髪を洗ったりするんだぜと売春宿の亭主から聞いてはいても、魂消た。他にもオイオイと思う事は有ったが、ペットの犬や猫との決定的な違いは掃除をしたり食事の仕度や後片付けをす

る事だ。女は洗い物や掃除が好きらしく、家の中は隅の隅まですっきり綺麗になって眩しいくらいだ。思えばこの一と月、一度も外で酒を飲んでいない。昼飯は今迄と同じに好い加減だが女のお陰で朝と夜はきっちりお米の御飯を自宅で頂いている。その栄養でデブになってきたのだ。

「寂しいな。久し振りなのに、もう帰っちゃうの？」

女には朝、十時を指差して家を出てきた。小一時間飲んでユリに勘定を頼んだ。

「銭が無いだよ。それに独身の健全な青少年は、あんまり遅くまでは遊ばないもんだよ」



「嘘だもんね、どっかい所に行くんだもんね」

「なんだ、バレてんのか」

工務店に付き合って神経が疲れた。気分は今少し飲みたかった。帰る約束を一時間以上過ぎ、女がどうしているか気には掛かったが久し振りの外でのお酒だし言葉の苦勞の無い無駄話は楽しい。最後に来た晩、彼ができたみたいにユリが言っていたのを思い出し、からかいたくなった。手招きして訊いた。

「今日は見かけないけど、うまく行ってる？」

「……、もちろんよ」

言い淀んだユリを生っぼく感じ、ドキリとする。

若い男と女のする決まりきった諍いや腥ゴツコ

を、自分達だけが特別のように思い込んで真剣にや  
っているのだ。

「今の言い方って、まずい感じでなくない？ な  
んなら仲良しのテク、オイラが手ほどきしてあげよ  
うか」

「大丈夫、教えて貰わなくてもコーさんの言う事  
とかなら知ってるもん」

——いつもどおりのユリだ。素早い立ち直りが愉  
しくて店を出るのを先へ延ばしたくなった。考えて  
みれば家で待っているのは行き掛かりで買い取った  
外国人の売春婦だ、嫁や彼女に気を遣うみたいに時  
間を気にする必要はまるで無いのだ。

「もう少し飲もうか、代行車に予約しといておく  
れ」

「ワイイ、ヤッター。うんと騒ごう」

動物公園からの帰り、晩飯を喰いに寄った良庵から亭主の店に電話を掛けた。四時半だった。境川を渡ってすぐの所で今から晩飯を喰うからそっちに着くのは五時半前後になると伝え、ついでにボインで髪の毛の長い新顔のキープを頼もうと思った。チビな女をもう一度、今度は素面しよふで抱いてみたい気はした。既に二十時間ちかく一緒だ。アベックみたく手に手を繋いで公園を歩き、好みではない顔にも慣れた。随

いて歩くのが嬉しい犬っころのようで可愛いとも思  
った。もう一度抱けば買い取ってしまいそうな気が  
した。

突っ込んで放つだけでなく叱られるのが怖くて嫁  
や彼女にはできない事をやってみたくて客は錢を使  
うのだ。くすぐったがりな女が毎日違う男に押さえ  
られ、一と月も経てば明るい部屋でパンツを脱ぐの  
にも慣れてしまうのだと思うと無残で、何とかして  
やりたい気がした。しかし何とかするにも買い取る  
他に方法を思い付かなかった。売春を警察に通報す  
れば女は保護されて送還になるだろうが債務が消え  
る訳でなく、自由にはなれない。亭主の店でならシ

ヨートで百五十人、泊りで七、八十人と遊べばチャラになる借金が、送還になれば五倍か十倍の人数と寝なければ追いつかなくなるのだ。それに亭主が捕まって店が無くなると近くて便利な遊び場所が一つ減る。友達みたいな口を利いても亭主はヤクザだ。万が一にも密告がバレたら青タン（青痣<sup>あおあざ</sup>）を眼の縁<sup>ふち</sup>に貰うくらいで済む筈はない。要は誰にも何のプラスにもならない。

買い取るのに必要な百二十万円の都合も三万円が目安だという月々の仕送りも平気だが、一つ屋根の下で他人<sup>たにん</sup>が二人暮らしていくのは大変だ。バツイチだから分かる、同じ飯台で飯を喰い、同じ便座で糞

をひるのだ。そのうえ言葉が通じない、厄介になるのは目に見えている。気に入らなければ交換可だが、それでは何とかしてやる意味が無くなる。女に借りは無い、赤の他人だ。股の黒子は未練だが高い銭を払って厄介を背負い込むのは大馬鹿だ。関わり合いにならないのが一番、気分直しに別の女と遊ぶのがお利口だ。

コールを十回鳴らしても亭主の店は出なかった。

四時半までには店に入っていると聞いていたが自宅からの移動中なのだろう。奮発して女と鰻うなぎを喰い、勘定を済ませてからダイヤルしたが呼び出し音が鳴るだけでやはり出ない。店に行くのはヤバい予感が

する、警察が摘発に入ったのかもしれない。一と月くらい前、泊りで買った女に生理が来てクレームを付けた事がある。出る筈はないと思って店に掛けた電話が通じて驚くと、自宅に転送している、時代に遅れているよと言って笑われた。開店時間の五時を過ぎているし朝の七時でも電話の繋がった亭主が全然出ないのは普通ではない。今日だって動物公園に行く時には通じているのだ。最終的には放り出すしかないと結論は見えていても女をどうするか、焦った。取り敢えず事務所に寄り、日報を捲めくって亭主の自宅の番号を調べ、女を連れて部屋へ帰った。その途中、牛乳を買いに寄ったコンビニから亭主の自宅

と店に電話してみた。事務所から掛けるのは逆探知か何かさそれそうでマズい気がした。出なかった。団地の公園のボックスからも掛けてみたが同じだ。

女を先に風呂に入れ、トランクスとランニングを貸した。入れ替わって服を脱ぎ、洗濯機に水を張っている。と女が洗面所に戻って来た。笑っていた。見ればランニングの襟えりを一本の紐ひものように寄せ、小振りな乳を誇ほこるみたいに胸を張っていた。裸はだかを見られるのが嫌いな筈なのにどうした風の吹きまわしだろう、触られたくて来たかと理解したが違った。右手を乳に伸ばすとひよいと躲かわした。ゆるゆるな恰好が可笑しくて、単純に見せに来たのだ。トランクスも



女には緩く、ランニングの裾すそを捲まくると縮むゴムの力で辛かろうじて半尻はんじりだった。

摘発ていぱつが独り合点がてんであるようにと期待したが翌日も翌々日も亭主と連絡は付かなかった。店は繁盛していたし百二十万円で仕入れたばかりの女を放り出していた。夜の夜逃げは考えられない、繁盛をやっかんで隣の居酒屋あたりが売春を密告し、手入ていれを喰らって逮捕されたのだ。そう見当を付け、新聞の地域面を毎朝チェックしたがそれらしい記事は目に付かず、気分きぶんの据わり心地はあましく（落ち着か）なかった。

梅雨の初めの頃だった。シヨートで遊んだ女を十時半に店に届けると常連が四人、カウンターで飲ん

でいた。あと三十分もすれば面白い事が始まると誘われて仲間になった。十一時十五、六分過ぎ、シヨートで買われた最後の女が戻ってきた。皆が面白い事を待ちかねていた。亭主が看板の電気を消し、ドアに鍵を掛け、カウンターに入って東急ハンズの手提げ袋から拳銃を出した。お祭りや運動会の露店で売っていた巻き玉火薬の百連発みたいにピカピカに黒かった。トカレフのコピーで中共製だと言った。弾が左に行く癖が有り、その分を計算して狙わなければ当たらないそうだ。指紋を残さぬ要心に亭主は軍手をしていた。弾は抜いてあるからいじってみればと真っ先に勧められ、ビビった。

大韓民国製のテレビはすぐ壊れるし釘は打つと曲がる。飛行機の運チヤンはドジなスパイをやらかして樺太沖で撃墜だ。殺るか殺られるかの土壇場で撃つた弾の方向が明後日（方向違い）じゃ、腐れな釘よりバチ当たりだ。万事が半端なくせに自分の国の名前に大や中華を付け、どっちもどっちの腐れだが弾の代わりにバチの当たる方が落語みてえで上等だと型枠大工の親方が言い、大笑いした。無理くさいが大笑いして勢いがでた。軍手を借りて順番にいじり、冗談でだろうがなんぼでなら売ってくれるかと訊く者もいた。

亭主がどう応えたかは忘れたが腐れなコピーでも

玩具おもちゃではない、買春かいしゅんだけなら警察にバレても多少きまりの悪い思いをして終わりだが本物の拳銃をいじっていたとなれば可成りヤバい。女を連れて帰って四、五日は、部屋に居ても会社に行っても電話が鳴るたびに肝が縮んだ。しかし帰りを待っている女がいる生活は、クソが付くほど真面目だった新婚の会社員の昔に返ったような気がして悪くなかった。

予想どおりだった。南警察が売春宿を摘発し、亭主と女房、女達全員が持って行かれたのだった。女房の七十を超えた厨房を任まかされていた父親もだ。亭主の甥おいが女達の買物や常連客の送迎おんぎようをしていたが偶々買物に手間取って逮捕をうまく逃のがれた。甥はチ

ビな女が三上と店を出たままであると知らず、摘発から二週間くらい過ぎたころ弁護士を介した亭主の指示で三上に電話してきた。相信（相模原信用組合）に行つて個人の通帳から百万円下ろし、四時までのパートを二時に上がらせ、シャツターを半分降ろして甥を事務所に来させた。

その頃には摘発を確信していたが相模原警察でなく大野台の先にある南警察が上溝の方まで取り締まるとは知らなくて驚いた。それに新聞が一行も報道しないのは不可解だ。外国人を使った売春宿の摘発が、原チャリげんの単独事故や大学生の万引よりニュースの価値の軽い筈はないのだ。拳銃の所持はバレて

いないと甥は言うが新聞に載らない裏には何か仕掛けが有るようなヤバい気がした。しかし女は買い取ってやるしかないと思った。

客の側がわからすれば摘発は貰い事故のような災難だ。団地住まいの独り者だから対応できたが普通の客ならいきなり女の面倒を見るのは一晩だって困難だ。持て余して新宿行の快速に乗せたり昭和橋あたりの河原に放置していたとしてもチャランケを付けられるいわれは全く無い。しかし結果として女を二週間抱かたいでいる、そして堅かた気だ。女を返し、遊び代もきつちりと清算して亭主との関係を一切チャラにするのが正解だ。とは承知していても甥のノツペリな顔

を見た途端、女が可哀相になった。

ラージポン（妊娠中）の嫁がいるのに甥は使い走りの他に収入が無かった。女を渡せば他の売春宿に叩き売るか立ちん坊をさせるかなのは見え見えだ。たとえブスでも三晩も同衾すれば情は移る。まして女は美人だし股の黒子は二百人と遊んで初めてのお値打ちものだ。それに買い取るにしても返すにしても出ていく金額に大差はない。幸いにもと言えらるのか。パスポートは預かっている。三月もすれば丹沢から風が吹く。陽だまりを温める暇も無く愛川町に太陽が傾いていく季節に、南の島に女というのも悪くない。

讓渡価格が百二十万円なのは変らなかつたが甥の口の利き方は債務者に追い込みを掛けるような調子でムカついた。お宅等たくらの打ったヘタで随分と肝を冷やしたし余計な錢もたんと使わせてもらっている、そのあたりの挨拶は教わってこなかつたのかいと脅したくなる気分を抑え、手付五十万、三ヶ月後に現金で納得させた。正真正銘の人身売買だ、領収書や支払約定書の類たぐいを残す訳にはいかない。五十万円持たせた姿をポラロイドで写した。

甥は亭主と同じくらいに女の国の言葉を話せた。

話し合いの場所を淵野辺駅南口のフィリップンパブの上のカラオケに移し、女を連れて来て三上が二百



四十万円で正式に買い取った旨、甥の通訳で理解させた。仕送りの保証と一人対一人の関係に馴れ、調子に乗ったり舐めた真似をすれば即刻売春宿に戻すとも伝えさせた。亭主が逮捕され店が閉まっている事は伏せた。ちゃんと意味が通じているのかどうか、甥の顔を見た女はべったりと三上にくっついて離れない。勘違いは困る、嫁や彼女にするのではないと念を押させた。

買い取ると決めても女と三年間暮らす気は無かった。実際問題として三ヶ月ごとにガムやサイパンに行くのは時間的にも金銭的にも半端でなく大変だ。手もとに置いておけるのは半年、無理をしても一年

がせいぜいだ。二泊三日終日フリーの格安旅行でも費用は二人分だし成田の行き来にも銭と時間はかかる。超零細の不動産屋が一年に四回も相模原を留守にすれば、会社は絶対にヤバくなる。

動物公園に行っていなければ女も警察に持って行かれていた。こっちのひよんな思い付きのお陰で無かった筈の銭が亭主には入るのだ。ロハで警察に持って行かれていたと思えば偉い儲けだ。七十万円の残金を半分か五十万円に泣いてもらい、浮いた銭でガムかサイパンに一回行って来て、半年で女を自由にしてやるのが誰もが納得できる名案だ。考えてみるよう亭主に伝えろと言いたかったが逮捕されてい

る弱味に付け込むと思われるのも癪しやぐでよした。

文字通り女は着きの身み着きのままだ。旅行鞆きひとつで成田から連れて来たと甥は言うがその荷物は店の二階か警察だ。他人様の前を連れて歩くような相手ではなくてもパンツの替えくらいはないと困る。女に貸したトランクスをなにげに穿いたら、洗濯してあるのに股の付け根が一日中エロい気分で困った。甥には通訳の手間賃で一万円くれている、店に行つて鞆を探してこいと言うと警察が見張みはりっているかもしれないと嫌がった。馬鹿野郎だ、言種いぐさに一理有るとは思ったが重ねて言うともう一万円くれと吐ぬかした。

買物物は恥はずかしいし疲れた。お金も一万円では

足りなかった。シャツやパンツはだいたいで間に合うがブラジャーやジーンパンはサイズを合わさなければまずい。女は外国人の売春婦だ。タカハシやダイエーに連れて行き、知り合いやお客に出くわすとみっとも良くない、中津の忠実屋に行った。千代田の文教堂で指差し会話帳も買い、ほっとした途端女に生理が来た。抽送が妙に滑らかで気が付き、慌ててテッシュを当てがうと女はされるままぼかんとしていた。そう見えた。今度は生理用品かよ！ 騙されているみたいないな恨めしい気がした。

女はいわゆるマグロだった。そのうえ明るいのは駄目だし股以外を触ると大騒ぎだ。自宅で大声は困

る。甥と会うまでは寝部屋の引き戸を細く開け、玄関の電気を頼りにゴソゴソやっていた。甥の通訳で女は自分の立場を理解している、筈だ。お願いして触らせて頂くみたいな気遣いは無用だ。少しずつ直した。

ドライブスルーを女は喜んだ。車に乗るのが好きだったし乗ったまま買物物の済むシステムが面白いらしく、何を買ってやっても喜んだが一番のお気に入りにはアップルパイだった。指示に素直<sup>すなお</sup>だったり上手<sup>じょうず</sup>にできた時には缶ビールを与え、次の晩ドライブスルーに連れて行った。嫌がったり下手な場合には擦<sup>くすく</sup>って黙<sup>し</sup>けた。女は一四四センチ、三四キロ

のチビだ。一七八・五センチとベビーブーム世代としてはノッポだが五八キロしか目方のない三上の腕力でも、少し本気で押さえると逃げるのは絶対に不可能だ。女は笑いながら憶えた。

笑わせて駄目な場合には玄関を指差した。言うことを聞けないなら売春宿に帰れという意味だ。亭主が逮捕され店が閉まっている事を女は知らない、泣きそうな顔で首を振った。マグロ状態の矯正には有効だった玄関を指差す脅しも明るいのを嫌うのにはあまり効かず、三上が蛍光灯の紐に手を伸ばすより先に女は気配を察して股に蓋をした。腋の下を擦っても手の甲を抓っても玄関を指差しても、両手を股

に重ねて固くまるまる。無駄な抵抗でも番たびされ  
てはキレル、手が出ていた。御免を言う暇も無かつ  
た。女は跳ね起きて便所に駆け込み、鍵を掛けた。

子供会の古紙回収のお知らせと一緒に四尺見当の  
細引きが二本、各戸の玄関ポストに配られた。分別  
しておいたチラシを縛って思い付き、ビニールテー  
プで後ろ手にしてハンカチを噛ませた。大声を出し、  
外に聞こえてはマズい。驚いた。女は俯すもまる  
まるも儘にならず、どこをいじるのも自由自在だ。

自分の股の黒子を女は知らなかった。鏡で見せて  
教えた。鏡に映る黒子は、露に行き止まってまごつ  
く花卉を歩く蟻に似ていた。黒子を見て女は変わっ

た。枕に尻を乗せて自慰をさせても蛍光灯の光を眩しがるだけになった。御褒美に五百ミリ缶を与えた。女は一気飲みして酔い、ストロークに捲れて見えて隠れる黒子を見たがり、鏡を手にして面白い恰好をねだった。そうなるから股以外をいじられるのは苦手で、乳を舐めるフリで笑いだした。

代行運転で洋子の店を一時に出た。女は起きていてこっちが照れてしまうくらい嬉しそうに迎えた。顔だけでなく身体全体が蕩けそうだった。女は摘発された店にいた外国人の売春婦だ。親切な人はどこ



にでもいる、どんな些細な事で面倒が始まるか知れない。自分の留守中には部屋を出ないよう、きつく命じた。ベランダに出るのも玄関のチャイムに応えるのも電話に触る事も禁止した。思えば可哀相なことをしている。女は一日の殆んどを指差し会話帳を見るか言葉の解からないテレビを見るだけで過ごしているのだ。それが二、三日ではなく既に一と月と五、六日だ。いじらしくなる。コンマー、二秒躊躇したが抱き締めて口を吸った。

昂ぶる。口を吸うのは一緒に暮らして初めてだった。女の舌はぼってりと厚く、絡めて啜ると気持が良過ぎて貧血が起こりそうだ。女も気持が良いらし

く、カクンと膝から力が抜けて重くなり、生っぽくてエロい。速攻で突っ込みたくなる。横抱きに持ち上げ、寝部屋の引き戸に手をかけると風呂が沸いていて口火だと女が片言で告げた。力の抜けたバツの悪さを繕つくろうような慌てた様子だった。朝、八時四十五分に家を出てから十回以上は小便をしているしカラオケの点数をユリと勝負して汗もかいた。それにショートや泊りで買った相手ではない、急がなくて平気だ。布団で待つよう身振りで示し、風呂に入った。

女で心配なのは妊娠と病気だ。妊娠はゴムを着ければ大丈夫だが病気はどうなのか分からない、口か

ら口で移るのだろうか？　それが有りなら可成りヤバイ。石鹸箱の蓋に水を受け、気休めに喉の奥を漱すすいだ。……、女はこの一と月間ずっと元気だし洗濯物を吊るしたり取り込む時、パンツの底に不自然な色を見た記憶は無い。自慰をさせても殆ど無臭の普通な股の匂いだ。たぶん病気を持ってはいないのだ。それにゴムを被せる前に舐めさせ、放った後も口で綺麗にさせている。口から口で移るくらいならとつくに貰っているだろう、今更心配しても消耗だ。

団地の風呂場は一間いっけんと四尺五寸、畳一枚半の面積だ。木造の小さな一戸建の風呂場と同じ寸法だが団地サイズの数字だし内釜うちがまなので浴槽が狭い。外釜そとがまに

すれば浴槽を一と回り広くでき、足もだいぶ伸ばせる。建物の基礎が木造の二倍くらい高いから外壁に釜を吊る式になるだろうが一階なので工事は脚立を並べて足場板を渡せばできてしまう。費用も今なら二棟現場の工事費に細工して済む。しかし構造の重大な変更に当たるとは思えないが管理組合に相談したり、総会の招集が云々かもなどと考えだすとだるい。築二十三年の中古だし相信の課長に頼まれ、根抵当を相場で付けてくれるのを条件に買った、女房殺しの曰く付きの瑕疵物件だ。頭を悩ませて手間をかけてやるのも無駄っぽい気がする。

バスローブを羽織って牛乳を飲み、煙草を啜えて

夕刊を見た。歯を磨き、便所に入って慌てた。トランクスを穿いていない。小便を済まし、寝部屋の引き戸をそっとあけた。やはり女は全裸で布団に仰臥していた。バスタオルを尻に敷き、天井の蛍光灯に気を付けの姿勢だ。小麦色したマネキンのようなスタイルにしばし見惚れる。チョコレート色の乳首とやや色の薄い乳暈、炎に変わる寸前の燻ぶりに似た叢が、マネキンには有り得なくてナイスだ。バスローブを脱ぎ、四つ這って重なる。

女はいくらか三上より体温が低いのか尻だけでなく身体全体がいつもひんやりしていた。風呂のほてりを女の身体で冷ますのはクーラーや扇風機の風で

涼すずむより省エネだし快適だ。全裸で蓄冷し、湯上りを待機するように躑しつけした。風呂で二、三考え事をした。大方おおおかたはヒゲを剃っているうちに忘れてしまったが久し振りに外で飲んだ酒が効いたのだろう、女と暮らしているのまで半ば忘れた。風呂を上がったとノーパンでいるのは、女との一と月の生活で習慣になつたようだ。

昼はまだ夏の陽気の日が多くても週が変れば十月、夜は曆こよみどおり秋だ。女の身体はひどく冷たい。小一時間は全裸でいる、健康保険の無い外国人だから風邪でもひいてこじれると厄介だ。足もとの上掛けを肩に引っ張り上げ、女の腹に目方を掛けて体温を

移した。温もりを味わうように女は二、三秒じっとしていたが躡けたとおりに三上を挟み、膝をこすり合わせて人間クラーの仕事を始めた。

一服つけて風呂のほてりは粗方おさまっていても冷たい内股は快感だ。やわやわと歯痒く、たちまち芯ができ、発条みたいに昂ぶる。女の形に当たり、そのまま突っ込んでこすりたくなる。右に転げて仰向けば女が起き上がり、ゴムを被せて跨るが、手順を変えて三上は上掛けに潜った。

亭主の店でならお金を諦めれば女は客と五分でいられた。自由恋愛が営業方針だったから建前上は客を選べたし、亭主が控えているので遊びの限度を

客が越えれば怒ったり拒否したりが可能だった。今の女は三上の言い付けに従うしかない。何をされても拒否できず、<sup>かば</sup>庇ってくれる者も愚痴を語り合う仲間も無く、亭主の店にいるより辛い毎日かもしれない。だからと言って自由にしてはやれない、一と月で百二十万円は緩くない。それに人身売買という違法行為だから所有権などを気にする必要は皆無だが、敢えて気にすれば残金を済ませるまで女の所有権は三上に無く、預かり物と心得ておくのが無難だ。キユーピーがジジイになったような人畜無害な顔をしていても亭主は拳銃を持っているヤクザだ。結果は同じでも順序をこっちの都合で変えればアヤを付け



られて尻の毛まで糞むしられるか残土に混ぜて葉山島の  
谷底だ。帰宅を蕩とろけて嬉しがり、冷えきった身体で  
健けん気に躰たげを守る女に今してやれる事は、ビールを飲  
ませてアップルパイを喰くわせるか舐なめて気持良くさ  
せてやるくらいがせいぜいなのだ。

上掛けに潜れば真っ暗で何も見えない。チビな身  
体を実際以上に小さく感じ、寂しいような哀しいよ  
うな妙な気分がした。しかし左の乳を舐なめた途端に  
笑いだし、単純に遊びたくなる。乳首を齧かじって黙ら  
せ、脚を広げさせた。股の付け根の脚を吊る臄けんが湯  
飲みの糸尻いとじりのようにか細ほそく、妙な気分にもたなる。  
苛めるのではない、気持良くさせてやるのだ。塞が

りを分け、舌の先をそよがす。齧られて笑いを泳こらえていた女が拒否を意味する自分の国の言葉を吐き、イヤとかダメの意味とは反対に三上の頭を押さえて強く挟んだ。

チビで子供みたいでも女は外国人の売春婦だ。病気を貰うのが心配で毎日抱いていても乳や臍の他を舐めたり吸ったりする気はしなかった。やってしまった今、押さえて挟まれるのは悪い気分ではなかった。指で除よけても縮れ毛がうるさいし美味しい味がある。指で除けても縮れ毛がうるさいし美味しい味がある。するでもなく疲れる作業だが、所有する者とされる者の立場が逆転し、女主人を飲よるばすバター犬にでも成り下がったような気分が新鮮で嬉しい。口で息

をして丹念に舐めた。しかし女は濡れてこない。いつもならすぐに溢れ、バスタオルでは吸いきれず敷布の染みになる程なのだが、痂りを剥いて舌の先で掬うとぴくんと肛門をすぼめ、気分は悪くないようなのに気のせいか苦いような粗い味がしてきた。全裸での長い待機で体調が狂ったのだ。ショートや泊りで買った相手ではない、少し眠って様子を見てみるのが賢明だ。そうは思っても盛り上がった気分の持って行き場所に困る。取り敢えず右手の人差し指に唾を付け、いつもどおりにしてみた。たつぷりと微温い。ほっとして手首を返し、奥から手前にザラザラを搔いた。

怒ったと思った。痛くしたのだ。女がいきなり男の声で怒鳴りだした。違った。怒ったのではなく女の身体が咲いたのだ。感動で三上は胸がキュンと縮んだ。しかし指でなのはちよつと面白くない。遅れ馳せでも突っ込んで今の状態を知りたいがゴムを被せる中断に女は冷めてしまうかもしれない。思案する一、二秒の間にも女は唸り、腰を回して人差し指を立てた三上の拳骨を濡らした。ゴムはパスする。既に舌を吸い、塞がりを分けて舐めているのだ。上体を起こし、膝を張って定めた。

昨日までと女はまるで別だ。ゴム無しのをせいもあるが明らかに熱く、滑らかだが重い。力を入れて尻

の穴をきつめ、一気に道を貫く。女は咆えた。臓腑を震わせて放つ、深くからの声だ。女の肛門に当る股の垂れ下がりが濡れ、硬くまるまる。同時に道の奥に真空を感じ、真空の負圧に吸われて昂ぶりが伸び、裏から女の臍に触るみたいだ。ゴム無しだから構造の微細な変化が鮮明だ。触るコリコリを突いて捏ねると女は収縮し、ふるえだした。泳えた。首と胸に汗が噴き、粒になって滴る。それで力を使いきり、尻の穴をきつめる感覚がふやけた。

ゴムをパスした。女が病気に罹っていれば貫うのは覚悟だが妊娠は困る。しかし力を使いきり、女の頂点をもう一度泳えるのはきつい。ゴムの箱は目覚

し時計の横に灰皿と並べて女が用意してある。装着も女の役目だがいつもの手順をしていては時間を喰って勢いきおいが萎なえる、自分でやれば十秒だ。上体を倒し、腹を重ねて右手をゴムの箱に伸ばすと女はしがみ付き、脚を絡めて三上の尻かんまきに門かを掛けた。

ゴム無しの性交は七、八年振りだ。しがみ付かれて動かずにいると女に溶けていくみたいで何処までが自分の形か判らなくなる。一と月ものあいだゴムを着けて突っ込み、ひどく損をした気分だ。力を送って形を確かめると女は甘く呻うめいて道をすぼめた。

苛こめたくなる。嫁よめや彼女はたではない、大枚たいまいを叩たたいて買い取り、一切の面倒を見てやっている外国人の売

春婦だ。言ってしまったえば年季が三年の性交用の奴婢、機能が女の遊び道具だ。いちど咲いたくらいで気分を出して甘えた声を出すのは百年早い、コリコリを捏ねて刻んで身分の違いを教えてやりたくなる。しかし股の垂れ下がりがまでが女に溶けていくようでもを着けに尻を引く踏ん切りが付かない。……、いよいよになったら腹の上に放てば好いか。

高を括ったが結局は中に放った。限界を感じて引く尻を手と脚で女が強く押さえた。チビな女の弱い力でもギリギリの間際だ、咄嗟に深く突いた。半端で同じ心配をするのは間尺に合わない。それに妊娠はたぶん大丈夫だろう、女はそろそろ次の生理だ。

回し読みでむかし見たF6セブンか平凡パンチの記憶では、生理前の十日間くらいは安心な筈だ。

仰臥させても女の乳は左右に流れず力瘤ちからこぶのようにまるい。万歳に押さえると胸郭が反り、まんまるな形が縦に少し楕円だ。左の乳に息を吹いて笑わせ、乳首を舐めて三上はにが笑した。いじり始めて一分も経たないのに、股のしよぼくれが青い匂いがむんむんの生木なまきの丸太まるたみたいに、によつきりだ。

夜は明けてきたが部屋はカーテンで暗い。猫っぽい目が暗くてもくつきりと鮮やく、一と月見ても女



は美人で見飽きない。しかしこっちは四十三、顔が  
まろくなつたみたいと言われたり自分でにが笑いす  
るほど元気なのは飯の仕度を女が毎日してくれるお  
陰だが、朝と夜を家で食べるようになってから三回  
に二回の頻度の不能がまるで種馬だ。不惑も厄年も  
過ぎたジジイのくせに、喰った飯が即エツチの滋養じよう  
に変わる単純な仕組みの身体で安っぽい気がした。

女の作る飯は美味とはおよそ言えない。南蛮なんばんをや  
たら使い、作り方は過激だ。砂糖をかけた挽肉ひきにくにポ  
ットのお湯を注いで掻き混ぜ、酢すと味の素もとを振り、  
微塵みじんに刻んだ南蛮を真っ赤に散らして喰えと勧める。  
仰け反る、もろ生肉なまにくだ。危なくて必ずチン（電子レ

ンジ)はさせるがそれと似た物を朝と晩、毎日きっちり頂いている。朝は牛乳、昼はコンビニ弁当かカツプ麺、夜は酒とツマミだった食生活を思えばタフになるのは納得だが、抱いていないのは生理の真っ最中の二、三日だけだから立派だ。

乳を舐めるのはやめた。そろそろ女は次の生理だ、のんびりしていると今にも始まるかもしれない。遠からず亭主は出てくる。十万円でも良いからと四、五日前、嫁の出産費用を口実に金をたかりに来た甥の話では保釈金とか罰金とかの面倒を亭主の兄貴分が見てくれそうだと言う。こっちも仕入れた現場にお客が付かなくて広告代やパートさんの給料の支払

いにもピンチだ、出産費用もその人に相談するしかないだろうと言って足代きしだいに一万円くれて帰したが、出てくれば借金の返済に亭主は女の売り値を上げてくるかもしれない。そうならば手付放棄で女を返品にするのが一番だ。確かにいじらしいと感じたし胸キュンもした。しかし嫁や彼女にするような相手ではない、買い値が百二十万円の遊び道具だ。中で一度放ったくらいで胸キュンしたり乳を舐めて勿体を付けるのはバチくさい。

刺々とげとげな毬まりを押さえていた目方を浮かし、右手で股を探った。テッシュの吸わせ残りが乾いて糊になり、チャックを掛けたみたいに女の形は塞がっていた。

貼り付いた縮れ毛を尻の穴を起点にほぐし、道を付けた。熱くすばまり、零れるくらいにたっぶりだ。何だろう？ 指で定めて貫くと冷たさに触った。ような気がして深く抉ったが無い。気のせいだろう、チャックにこすれるみたいなチクチクや御粥のような内容も、貫いてしまえばすぐに普通だ。ゴム無し性交は七、八年振りだ、行き止まりのコリコリを冷たいと錯覚したのだろう。そう結論し、抉り直すと女は膝の裏に手を当てて全開に構えた。咲くことを知り、また咲きたくて夢中なのだ。分かり易いのが愉しくて短いストロークを緩いピッチで五、六回やり、強く打つフリをして止めた。四、五回繰り返

すと女は焦<sup>じ</sup>れ、鼻声を出して尻を揺<sup>ゆ</sup>すった。

とことん焦<sup>じ</sup>らして苛めたくなる。マグロだったのを咲かせ、尻を揺<sup>ゆ</sup>すって焦<sup>じ</sup>れるほどエロくしたのに亭主が出てくれば返品かもしれないのだ。濡れた音をわざと立て、三三七拍子で打つ。三三七を一回やっつては深呼吸を二、三回して息を整え、女の頭が畳に出るまで休み休みして打ち、バスタオルに尻そうとして尻を掬<sup>すく</sup>うと背骨の付け根まで女は濡れ、敷布の中央が縦に細長く冷たい。

三上は急に判った。眠る前に放った精液が行き止まりに溜<sup>ため</sup>まっていて、それに触って冷たかったのだ。

――、女を嫁にすると三上は決めた。

牝犬は一度交尾した牝と毛並が同じ仔を別の牝と番つても何故か一と腹に一匹は必ず生すようになる  
と、ペット可の賃貸を探していた麻布の学生から聞いた。人間も同じだ。ぶら下がりをやっていた不良女が三十路を前に宗旨を改め、斡旋業者の仲介で見合した。嫁になって三年、生した子供が真つ黒だった。妊娠は大丈夫だとしても精液の形質は女の血と肉に染み、覚醒の時を既に待機しているのだ。

女は外国人だし年の差も半端ではない。しかし咲かせた女だ、一日一日を重ねれば一年一年はすぐに過ぎる。たぶん五年十年だってアツと言う間だ。何でも有りが男と女だし、こつちも千キロも遠くから

来た余所者だ。それに四十を超えたバツイチ、外国人が嫁でも親が嘆いたり兄貴や従弟に笑われる心配はまず無い。袖振り合うどころか毎晩エッチして腕を枕に貸して眠っている、この先も今までと同じにやって行けば良いのだ。

女の尻をバスタオルに戻し、目方を乗せて強く打った。休み休みの三三七に女は燻ふりきっている。ワンストロークで咆え、脚を掲げてビクビクとすぼまる。相手は嫁だ、そうと決めた記念の一発だ。命中するなら早いほうが良い、今すぐ妊娠してもこっちが五十の春に子供は小学校の一年生だ。せり上げるコリコリを捏ね、頂点を合わせた。

擦くすくって抓つかり、売春宿うしゅんしゆくに帰れと玄関を指差して脅おそした。プツン切れてビンタもした。買った女を相手に見せろ見せないを続けるのはだるい。ビニールテープで後ろ手にして鼻を摘つまんでハンカチを噛かませ、電気歯ブラシで擦り洗濯バサミで抓つかった。……、男と女のお遊びだ。それで嫁にしてやるのだからオライだ。バツイチだから分かる。男と女がうまく一緒に暮らすには始まり方や相手を好きかどうかは殆んど意味が無い、お互いが邪魔でないことが一番だ。女は一度も邪魔でなく一緒の一と月は悪くない、直ちか帰かえして毎日抱かかっているのが何よりの証拠だ。

女と暮らすようになってすぐ、玄関を開けて時折



り気になっていた男の独り暮らしの匂いが無くなった。味は兎も角、手間いらずで飯は喰えるし会社から帰れば速攻で入浴ができ、不能のくせに女を買っていた無駄も無くなり、一緒の一月は良い事ばかりだ。少しチビだが女は美人だしスタイルは抜群にナイスだ。慣れてしまえば吊り目な顔も可愛いし縦細な臍とツンとした乳、歩くと背骨の付け根の両脇にできる笑窪は、ラジオ体操をフルにやらせてもエロいくて見飽きない。加えていわゆる福マンぽい。社有が一棟決まったし、パチンコ騒ぎの奥さんは五枚もビール券を付けて一万円を返しに来た。田代の伊依さんが回してくれた大野台の二百坪が、FAX

を送っただけで小菅の業者と契約にもなった。坪九十万、片手<sup>かたて</sup>で五百四十六万円の手数料だ。

ガムやサイパンでなく、いきなり女の国へ行ってみようか。言葉の通じない女の気持の確認はちよつとした仕事だ。ゴム無しを拒否しないのだから嫁になるのに異存はあるまいが一緒に国へ行き、すんなり随いて帰って来るようなら口説く手間が省ける。

女はウエイトレスのような事をして、気が向いたら酒の相手を少しすれば良いと誘われて一切の費用を全額前借<sup>ぜんしやく</sup>で日本に來ている。その金額が建前<sup>たてまえ</sup>で二百四十万円だ。売春してそれを三月<sup>みつき</sup>で返済するのだと成田に着いた途端に引導だ。うまい話を真に受

けて日本に来てしまった女もいる、

「話が違う！ ペテンだ」と騒ぐ女がでるのは当然だ。騒ぐ女を問答無用で女衒せげん達が折檻するさまは、反吐へどを催すと売春宿の亭主が語っていた。たとえば売春を承知の上であったとしても若い女が身体をカタにして出稼いせぎに来るのは半端な覚悟ではない。一緒に国へ行ったら事情の重さに自分一人で帰って来そうな予感だが、そういう結果もお洒落だ。何がなんでも嫁にしたいと逆上のぼせている訳ではないし、自分の都合が何様だって一番だ。

関節が疲れたのだらう、女が人の字に脚を伸ばした。上掛けが一緒に下がって三上の尻がまる出しに

なり、股の垂れ下がりがうそ寒い。右手を伸ばして尻に手繰ると女が甘い声を出した。手繰る拍子に腰がねじれ、繋がり具合が少し変わった。突いて直した。くすぐったかった。頂点を合わせて芯は消えているが形はまだちゃんとしていた。

「キムチノイイ」

女もくすぐったいのだ。

「キモチガ、だろう」

「キムチノ、ダルー」

いくら教えても女はノとガの使い分けが苦手だ。

しかし今はわざとだ、声が笑っていた。お返しに肘で支えている上半身の目方を女の腹に掛けた。息を

吸えずに苦しがり、横向きになろうとして女は膝を立てて力んだ。右と左に力む間合にびくんと道がすぼまり思いがけない快感だ。新たな発見が面白くて目方を更に掛けると女は三上の首を叩いた。拳固だし空気を吸いたくて顔は必死なのに猫のパンチみたいで全然痛くない、可愛くて口を吸った。

チビのくせに女は脚が長い、少し引きずるが三上のパジャマのズボンを裾を折らなくて穿けた。繋がった状態で口を吸うと自分の首を覗こうとするように恰好がきつい。肩が凝り、背中を反らして首を回した。女の乳がまるっこく弾み、舐めて吸いたくなる。しかし笑いだすだろう女を押さえ、背中をまる

くして乳に屈かがむのは緩ゆるくない、放はなつたばかりの四十  
三のジジイだ。魚が泳ぐみたいに背骨を撓しない、右の  
乳首で女の左乳首をちよんと触った。照れる。女よ  
り硬く、燐寸マツチの頭か鼠の糞のようだ。

乳首で乳首にじゃれていると上の階が遠くを飛ぶ  
ジェット機の音で便所の水を流した。それで気が付  
けばカーテンをしていても部屋は明るい。時間を知  
りたくなるが目覚し時計は女の頭で倒れ、カーテン  
を透けた光が反射して文字盤が見えない。今日は定  
休日だ、寝坊して平気だ。それに布団を干したり洗  
濯物をベランダに吊るすのは、嫁になるのだから女  
のこれから毎日の仕事だ。楽勝だ、起きたら手順を

教えてそれで済む。上掛けを肩に引っ張り上げ、儲けた気分で女の口をまた吸った。

気持良かった。味はしないが気持良くさせる成分を女は分泌ぶんびしているのだ。逆も有りのように女は貪むさぼるみたいに三上の舌を吸い、息が熱い。歯並はならびをなぞると舐め返し、部分入れ歯の金具が気になったらしく、犬歯の歯茎はぐきを集中して舐めだした。義歯いればがバレて体裁が悪い、やめろと思うのが快感だ。形に芯が甦よみがえった気がして力を送ると案外と心許こころもちない。

年を思えば当然だと自分的には納得だが困る、膝の裏に手を当てて女が全開の構えだ。

四十を超えてから芯の無い状態でのストロークに

は慣れている、応えてやりたいがスタミナが限界だ。肩の凝りが鈍い痛みに変わり、上半身の目方を肘で支え続けるのはきつい。相手は嫁だ、そうと決めた初日から気張ってみせても流行らない。無視に決め、目を閉じて目方をゆっくりに重ねた。息をする女の胸が柔らかく優しく、惚れた女と眠りに落ちて行くように素敵だ。認めたくない気もするがこのチビに惚れているのだ。

司法書士の先生は外国人を嫁にする手続を知っているだろうか。日本での犯罪を目的とした中国人女の国際結婚が飲み屋で話題になったとでも語り、起きたら桜山さんの事務所へ電話してみよう。未成年



なのが問題となるなら二十はたちになるまで三月みつきに一度、里帰りを兼ねて女の国に海水浴に行つて来れば良いのだ。

女はまだ十八だ。和泉短大か相模女子大あたりの電柱に『求ム家庭教師』のビラを貼り、土日の昼間ひるまに読み書きを見してくれるバイトを付けてやればノとガの使い分けくらいすぐに憶える。ノとガとテニヲハを憶えたら、『今日の料理』を録画してテキストにするのだ。そうすれば南蛮で真っ赤な砂糖味の食い物からも解放され、女にも話し相手ができて一石二鳥か三鳥だ。いや、先生の事務所より亭主の甥みがらに電話を掛けるのが先だ。残金を済ませて女の身柄みがらを

確保しなければ一切がオジャンだ。

半分うつつでいると括くくる線を感じた。おやつと見ると女はニツと笑った。見慣れても笑うと本当に子供だ。御菓子みたいに可愛くて本当に十八なのか、パスポートが本物なのか、急に不安だ。パスポートが偽物にせものだと嫁にするのがパーになるだけでなく不法入国者を匿かくまった容疑で逮捕の可能性だってある。

……、しかし女は暴力団の商品だ。拳銃を持っている連中が組織の看板で流通させている、言わば一種のブランド物だ。半端がバレれば最悪の場合、最後には撃ち合いになって死人がでる。——、たぶんパスポートの偽造は無いだろう。

理屈で納得し、信号を返したが駄目だ。完全に縮こまり、股に掛かる目方が重おもしになって辛うじて出ないでいる状態だ。それでも応えようとした意思は通じたらしく、女は小刻みに括りだした。

嫁にすると決めた気分が壊れる。いじるたびに反応が異なるのが面白くてタンポにいたイズミさんの真似をさせた覚えはまだない。小刻みに括り、効果を測るみたいにぬるりとしごき、股をしゃくって深く摺み直されロマンチック気分は吹っ飛んだ。

八王子のトルコの女は二日出て一日休み、月に二十日の出勤で百人の客を相手にする。ふざけ方をちよつと間違えると十九、二十の女でも仕返しはイズ

ミさんに負けない。チビで子供みたいでも女は出稼  
ぎの売春婦だ。日本に来る前に白や黒、褐色や黄色  
の肌の男等おとこちを百人単位で腹に乗せ、技を仕込まれ  
るか自得じとくしていても不思議ではない。思い返せばモ  
ーテルでの爆睡は尋常でなかった。飛行機と車の長  
旅で疲れているのだとその時は単純に思った。しか  
し成田に着いた翌々日に女は相模原に来ている。股  
の黒子は二百人と遊んで初めてだ。受領の検品をし  
た女衞達も珍しくて、味見で二日間、輪姦まわしている  
のだ。

女は外国人だし年の差は親子だ。売春婦でなけれ  
ば出会うことは絶対になかった。百人単位の性交は

有って当たり前と承知していた。そのつもりでいたが、気分が急にガックリだ。

何でも有りが男と女でも外国人の売春婦を嫁にするのは無茶だ。確かにいじらしいと思ったし胸キュンもした。しかしそれだけの事だ。こっちは不採用の場合を考えて面接に行く交通費にも頭を悩ますような状態から三年で店を構えた不動産屋のオヤジだ。その気になれば一日百軒の四番（飛び込み）で鍛えた面の皮の厚さと話術の巧みさで、女を仰向けに転ばすくらいは訳がない。バツイチだから知っているの転ばせてからの先を思うと面倒でヤモメしているのだ。何が哀しくて外国人の売春婦に惚れる必要が有

るのだ。言葉も肌の色もさまざまな男等の汗と脂と涎よだれの滲み込んだ女を一時いつときにしるマジで嫁にする気になり、ひどく損をした気分だ。

刺々な毬に目方を掛け、強く信号を送り直した。ストップの合図だ。気分は白けてもゴム無しだから女の技は生々に効く。痛痒いたがゆく昂ぶり、全開でザラザラにこすりたくなる。しかし眠る前からだと三連チヤンだ。ゴム無しなのに途中で有耶無耶になったりしてはみつとも良くない、相手は初潮の前から客を取っているかもしれない外人の売女ばい女だ。それと小便をしたくなってきた。

目が合った。

「キムチノダルー、オイラ？」

三上はコケて嘔きだす。女も笑いだし、三上をひり出そうと息むみたいに腹の奥がすぼまった。

馬鹿野郎だ！ オイラが眠り、置いてけ堀ぼりになるのがつまらなくてじゃれていたのだ。女の気持が伝染し、ふくらみ始める咲く花の気分がした。

「クー、泣かせるぞ！」

気分きぶんに照れ、声にドスを効かした。クシユヴは真顔まへんに返ってしがみ付き、脚を絡めて道の傾角をストロークと等しくした。ストライクでコリコリに当たり、本気で泣かせたくなる。

\*

サイドテーブルに置いたクッキングタイマーが鳴り、いつもどおりにクーは鼻声をだした。惚れた女とのじゃれっこは理屈抜きで楽しい。いじり合っているうちに本気モードに相手が入ったのを感じるのは、咲かせて放つ以上の快感だ。しかし毎朝、新聞配達のパイクの音を合図にくっついて来て離れてくれないのは困る。何度も泣きを入れたが言葉が解からないフリをして首をかしげ、ニツと笑って尻の中を擦る。可哀相だが奥の手を使った。家出して一人ぼっちにしてしまうと云って脅し、普段の朝は十



五分間仰向けに寝てクーの好きに任せることで勘弁にしてもらった。面白いもので、話がまとまって一と月もすると指では判らなかつた黒子の膨らみが舌で判るようになり、更に三月も経つと弾力の微妙な変化で生理の始まりをびったりと当てられるようになった。：：、今月も妊娠は無しだ。今日のお昼か夕方までには生理だ。妊娠が無しと分つても今ではホツともガツカリもしなくなつてしまつたが、黒子を濡らした透明な滲みが白い粒に膨らんで滴るさまは、十二年間見てもエロいくてナイスだ。

嫁にすると決めた時、煙草をスツパリとやめた。

何でも有りが男と女でも二十五の年の差は重い、記

念の一発で命中していてもこっちが五十、クーが二十五の春に子供は小学校の入学式だ。それにジャパユキさんと混血児あいのこの母子だ、四十をちよつと超えたくらいでジジイがってなんかはいられない、バリバリに元気で長生きして面倒をみる責任が有る。

意気がる青少年のようなノリで煙草をやめ、橋本駅に二十五分のバス便だが4LDKの一戸建をユーズさばーに捌く価格で落札おとして子供部屋を確保し、寝る前に歯を磨くみたいに毎晩エッチしているのに全然おめでたにならない。協同病院と北里の駐車場までは合わせて五、六回は行った。毎度だがいよいよとなると決心が鈍った。治療が効き過ぎて五つ子が産

まれても困るし、診察されるクーの恰好を思うと気が狂い、目玉の裏が赤くなった。珍しくて医者黒子を絶対にいじる。

何がなんでも子供が欲しい訳でもないから冗談を語れるが覚悟はしていてもプロにはっきり言われるのは痛い。チビなのと美人なお陰で三十になってもクーは一向に年を取らず、華奢な身体で布団を干したり掃除機を引っ張ったりしていると、休日の自分の分担当をチャツチャと済ますお利口な中学生のように見えるも元々は出稼ぎの売春婦だ、生理は有っても子を生なす機能は百人単位の仕事で壊れているのだ。繰り返し録画を見て作ってくれるクーの料理は美味

しくて晩酌のビールはちよつきりなかば、御飯は一膳で我慢しているのに目方が年に二キロのペースで増え、今では八十二キロの汗っかきになってしまったがオイラの身体に欠陥はたぶん無い、見合いで一緒になった前の嫁との間には、旧の二期校を来春卒業する真っ黒な女の子供を一人、生している。